

自己覚知に関するソーシャルワーク演習の実際

心理劇を活用した相談援助演習を通して

松 山 郁 夫

Practice of Social Work Concerning Self-awareness

Ikuo MATSUYAMA

要 旨

本研究の目的は、心理劇を活用した相談援助演習のソーシャルワーカー養成に対する教育的意義について、参加者の自己覚知に焦点をあてながら検討することである。相談援助のための面接の特徴より、クライアントを理解するには、多様な視点から人のこころ、気持ち、行動を捉えるためにソーシャルワーカーに自己覚知をすることが求められる。このため、社会福祉士養成課程での相談援助演習において、心理劇を活用して参加者の自己覚知を促す取り組みを行った。ソーシャルワークにおける面接、自己覚知の意義を捉えた上で、心理劇におけるウォーミングアップ（第1相）、劇化（第2相）、シェアリング（第3相）の各プロセスの実際場面を検討した。その結果、心理劇を活用した相談援助演習は参加者の自己覚知を促すように作用すると考えた。

Key word : ソーシャルワーカー、相談援助演習、心理劇、自己覚知

1. はじめに

日本では、社会福祉制度の体系的な整備、財政措置の拡大、及び社会資源のネットワーク化だけでなく、社会福祉サービスの質を向上させるために対人援助が重視され、その技量を高めることが求められるようになった。このため、相談業務において援助者であるソーシャルワーカーには、被援助者であるクライアントの価値観と自己の価値観を区別すること、価値観が異なってもクライアントを非難しないこと、価値の葛藤が生じた場合価値基準を明白にして混乱を避けるようにすること、及びクライアントの反社会的問題を取り扱うときに価値基準を明確にしておくこと、以上が必要になる。

社会福祉における相談援助のための面接においては、社会生活上の諸問題をめぐっての具体化、実際的な社会資源に関する情報提供などを含んだ内容となる。さらに、面接者であるソーシャルワーカーと被面接者であるクライアントとの専門的対人関係として成立し展開していく。面接者の共感的な姿勢は、それ

自体で相手を支える意味を持っている¹⁾。このため、ソーシャルワーカーにはクライアントとの援助関係等他者と自分を含めた状況を理解し、クライアントに的確な対応ができるように、自らの価値観、行動や反応パターンなどに気づき、自覚することが求められる。つまり、クライアントの問題に自らの価値観や感情を持ち込まないように、ソーシャルワーカーには感情、態度を意識的にコントロールするために自身自身の感情、態度、性格、能力等を捉える自己覚知がなされていることが不可欠となる。

2008年4月に厚生労働省社会・援護局から出された「社会福祉士及び介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」のなかで、「相談援助演習」の目標は、相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養することとした。その内容として、集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導（ロールプレイング等）を中心とする演習形態により行うことがあげられている。

実技指導に関してロールプレイング等とされているが、実際の福祉援助においては面接室でソーシャルワーカーとクライアントとの1対1の関係での面接がなされるだけでなく、福祉施設では集団生活の場面におけるダイナミックな相互作用のなかでの多彩な対人援助もなされている。したがって、ソーシャルワーカーを養成する教育内容には、多者関係のなかで実施されるダイナミックなロールプレイングによる体験をすることが求められる。このことに対応できる方法として心理劇があげられる。心理劇（psychodrama）における、役割交換（role reversal）、二重自我（double self）等の技法やウォーミングアップ、ドラマ化、シェアリングという自己表現をする3相からなるプロセスを有する心理劇を活用して適応行為をする体験を重ねることは、学生の自己覚知を促進するだけでなく、同時に他者理解も深め、さらには集団を対象とする福祉支援の方法を習得することに繋がると考えられる。なお、これまで心理劇は集団心理療法として統合失調症等の精神障害者に適用されてきたが、認知症高齢者や自閉症等の発達障害者の治療にも用いられるようになってきた。また、心理・教育・医療・福祉等の対人援助の専門職の養成プログラムの中にも取り入れられるようになってきた。しかしながら、現時点においては社会福祉士養成課程における相談援助演習で活用したとの報告はなされていない。

これらのことから、本研究の目的は、心理劇を活用した相談援助演習がソーシャルワーカー養成に対する教育的意義について参加者の自己覚知に焦点をあてながら検討することとする。

2. ソーシャルワークにおける相談援助における面接の特徴

旧社会福祉士養成カリキュラムの社会福祉援助技術演習では、福祉援助における面接場面の演習が重視されていた。この点については新カリキュラムにおいても同様となっているのは、面接がソーシャルワークにとって主要な道具であり、ソーシャルワーカーとクライアントの間に起こる相互作用をつくりあげている基本構造とよべるものから成り立っているためである。また、面接は言語技術のみでなく、ソーシャルワークの価値、知識、援助関係によって支えられている²⁾。

現在、新カリキュラムの相談援助演習に関する知見を記述した文献をまとめてみると、ソーシャルワーカーとしての面接には次の特徴があることが示されている。

①相談援助の面接は、クライアントの問題解決を目的として行われるため、意図的で、計画された目的・目標をもち、課題志向的である。したがって、ソーシャルワーカーには面接において責任や義務を負うことになり、援助者と被援助者という役割の差異、専門職の価値、知識、技術に基づく面接における方法やパターン、時間的・空間的限定をもつ。

②ソーシャルワーカーには、面接においてアクションシステムを形成し、援助のゴールの確認、アセスメントにおける情報の共有とニーズの明確化、プランニングにおけるゴール目標の明確化と計画の立案、計画の実施におけるニーズ充足と社会的機能能力の獲得と維持、評価・終結における有効性や効率性の評価、終結の決定と遂行を行う必要がある。このため、クライアントに対する受容、傾聴、共感、支持の姿勢をもつ。

③面接の効果をもたすために、要約や明確化等の内容の反射、感情の受容や明確化等の感情の反射、開いた質問や閉じた質問などの適切な質問、情緒的な支持、直接的なメッセージの伝達を活用する。

④面接の展開について、準備において面接の環境と内容の設定、波長合わせをすること、導入において面接の目的を定めたりクライアントの気持ちを理解するように努めたりすること、展開において話し合うべきことに焦点をあてながら、クライアントに援助の意味が理解できるようにし、感情や意思を明確化できるようにすること、終了において面接で行ったことや提供されるサービスとの関連について理解を深めることが求められる。

⑤クライアントが多くのことを語り、肯定的に自らのことを考えるようになるために、ソーシャルワーカーは表情、視線、動作、姿勢、身体の位置・距離・接触、声の調子・抑揚・強弱、間・速度等の非言語的メッセージの伝達を効果的に活用する。

以上①～⑤のことは、一般的な人間関係における会話にはほとんど認められないもので、ソーシャルワーカーとしての面接の特徴と考えられる。

3. 自己覚知

1930年代診断主義ケースワークにおいて援助者の自己覚知が重視されるようになり、他者を受け入れるためには自分自身を知ること、及び自己あるいは自己の感情を見つめる能力は他者の感情を理解することが重要と論じられている³⁾。これ以降、援助者の自己覚知に関する研究がなされるようになり、自己覚知とは自らの態度や感情を十分に知っていることで、究極的には他者に対する受容をもたすことと捉えられるようになった⁴⁾。また、自己覚知は、自己理解、自己認識、自己洞察といった概念と並ぶ心理学的概念の一つであるが、今日では主としてソーシャルワークの分野で用いられることが多い⁵⁾。

現在、新カリキュラムの相談援助演習に関する文献をまとめてみると、ソーシャルワークでは相談援助を行うためにクライアントを理解しようとするときに、次の4点が重要と考えられている。

①対人支援を行うには、人を理解するための専門家としての多様な視点を習得することが不可欠である。実際的には、個人の特性と性格の特徴、社会環境からの影響を捉えること、「構造化された面接」と「構造化されていない面接」を意識的に駆使すること、及び人の「こころ」「気持ち」「行動」を理解すること等が必要となる。他者を理解するためにはまず自己覚知をすることが前提となるため、人を理解するうえで他者理解と自己理解（自己覚知）があることを認識しなければならない。

②人のこころを理解するために4つの枠組みを設定する必要があり、「誰が問題か」については多様な視点から誰がクライアントを決めること、「何が問題化」についてはクライアントの意識と無意識・前意識、自我違和性と自我親和性等多様な視点から問題を捉えること、「なぜ問題が起きたか」については現在の結果から過去の原因を捉えるような結果から原因を推察すること、「どのようにかわるか」については無意識・前意識に働きかける技術を駆使すること、及び感情転移と逆感情転移について洞察することが求められる。

③人の気持ちを理解するために、話の内容を理解するための思考力だけでなく、気持ちを理解するため

の感受性と共感的理解が必要で、そのためには、自己の気持ちに向き合ったうえで自己覚知をしなければならない。

④「知られていること」と「知られていないこと」の違いを理解するためには、客観的に観察可能な人の行動を理解する力を獲得する必要がある。

以上①～④より、対人支援において多様な視点から、人のこころ、気持ち、行動を捉えることが不可欠であり、そのためには自分がどのようなことを感じているのか、どのような行動をとっているのかを意識すること、つまり自己覚知が必要であると考えられる。

4．心理劇の活用

以上のような相談援助のための面接の特徴より、クライアントを理解するためには、多様な視点から人のこころ、気持ち、行動を捉えなければならない。したがって、ソーシャルワーカーには自己覚知をすることが求められる。このため、社会福祉士養成課程での相談援助演習において、自己覚知を促進するために心理劇を活用することが考えられる。心理劇では、実施する集団にあるテーマに応じた劇を即興的・自発的に演じさせ、感情を表現できるようにする。予め決められた筋書き通りに劇が進められていくのではなく、診断的・治療的な目的のもとに参加者がある役割を演じるようにする。こうして、人間および人間をとりまく状況を探求し、日常生活のなかで埋没している自発性を引き出すことで、自己理解を深めることが可能となる。

心理劇の手順は、日常の役割と異なった役を演じることで自発性を引き出し、自己理解を深めること、参加者がお互い親しくなれるようにすること、及びありのままの自分を表現すること等の実施上の注意事項を説明した後、ウォーミングアップ(第1相)となる。その後、劇化(第2相)、シェアリング(第3相)と進行する。なお、ウォーミングアップ(第1相)では、参加者同士あいさつをしたり、歩いたり体操をしたりして緊張を和らげ、参加者で劇ができる雰囲気を作っていく。また、劇において主役を希望する人を募り、主役、その他の役を演じる人を決めていく。このように、他者の気持ちを感じとりながらウォーミングアップが行われるため、劇化(第2相)だけでなくウォーミング・アップ(第1相)自体にも自己覚知を促進する要素があると考えられる。

5．心理劇を活用したソーシャルワーク演習

以上のことから、ウォーミングアップ(第1相)を含めて、旧カリキュラムの社会福祉援助技術演習(2009年度)で行った心理劇について検討することにする。心理劇を活用した演習に参加した学生に演習後シェアリング(第3相)で述べた感想を再現して書いてもらい、以下にその一部を掲載した。学生は初めて心理劇を体験しているため、最初の数回は複雑な福祉の実践場面ではなく、日常的な場面を中心とした題材で行っている。なお、倫理的配慮として事前に学生に行った演習後に書いてもらった感想を心理劇の活用に関する研究に使用することがあるが個人のプライバシーは保護されること、感想に関する授業成績への影響はないことを説明し、同意を得ている。

心理劇は、ウォーミングアップ(第1相)、劇化(第2相)、シェアリング(第3相)と進行するが、本研究では、社会福祉相談援助演習において自己覚知の促進を目標にして5回に渡って15人の学生を対象に行った心理劇の実際場面の一部について検討する。劇化(第2相)では、演者が劇の中で起こるさまざまな事態に即興的に対応していく。相手役と役割を交換する役割交換、主役の分身をおく二重自我(ダブル)

他人が替わって演じているのを見るミラーなどの技法を使いながら、演者が感じたことを表現したり、場面に応じた行為をとったりすることにした。なお、心理劇を活用した演習は机や椅子を動かして心理劇ができるスペースが確保できる講義室で1回あたり90分程度実施した。

(1)ウォーミングアップ(第1相)での演習の実際

(演習1)一人十役

1)目標

参加者が架空の役割をできるだけ多くとること、相手の意図を察した上で適切な対応をすること、及びある役割を演じたときに生じた感情や考えを表現することを目標とした。

2)実施方法

椅子に座っている人のもとへ、主役が歩きながら他人やおばあさん、生徒、友達など、何かの役になりきって話しかけて、数往復の会話をし、元の位置に戻って、また違う誰かになりきって歩いて行って相手に話しかけていくことを繰り返した。なお、主役はそのたびに違う誰かになりきった。なりきる役が思いつかないときは、足が止まった状態ではなかなか思いつきにくいので、歩きながらなりきる役、せりふを考えるようにした。

3)実例

他人同士の設定で主役が「大学の体育館はどこですか」と椅子に座っている人に聞き、椅子に座っている人は「この道をまっすぐ行ってつきあたりの大きな建物です。」と答える等、2人で役割行為を演じていった。「何でも自由に考えてある役割を演じればいいですよ」と指示したことで、当初、参加者はどのように演じればいいのか思いつかずかなり戸惑った様子であった。架空の役割が思いつかなくなった時点で終了としたが、全員が6～7つ程度の役割を演じたところで終了となった。

その後、「やってみると、主役になってある役割を思いつくのは難しかった」との感想が全員から述べられた。さらに、話しかけられる人の立場から「なんて話しかけられるのだろう」、「いきなり話しかけられて答えられるのだろうか」、「いったい相手はどんな人なのだろうか。不安な感じがする」、「話しかけてくる相手の気持ちがわからないと何と言えいいのかがわからない」、「話しかけてくる相手が求めていることがわかるまでは対応することができなかった」、「ソーシャルワーカーもクライアントが話し始めないと相談援助ができないから、クライアントが話し始めて相手の状況がわかるまでは不安だと思う」等、緊張して相手から話しかけられる椅子に座っている人の立場での感想が多数語られた。

(演習2)支えること・支えられること

1)目的

参加者が相手を支えたり支えられたりする体験を通して、どのようにすれば安心して支えたり支えられたりできるのかを実感すること、及び各役割を演じたときに生じた感情や考えを表現することを目標とした。

2)実施方法

二人組で支える役と支えられる役になって、二人が縦に並んで後ろの人が前の人の背中の方へ手を出して前の人がある手まで後ろ向きに倒れ、それを支えていくことを行った。その際、お互いの位置を確認したり、会話をしたり、無言で行ったりしながら、どのようにすればお互いが不安なく相手を支えたり、支えられたりすることができるのかを考えるようにした。なお、この演習に関しては本学スポーツセンターにある柔道場の畳の上で行った。

3) 実例

最初は無言で行っていたが、徐々に、支える役は、「今手が背中から10センチくらい離れているけど倒れることができるかな」、「支えられそうだからもう少し倒れてみていいよ」、「やばいよ。これ以上は支えられないかも」等、支えられる役は、「これ以上倒れると怖い感じがする」、「話しかけてもらったら不安な感じがしなくなる」、「最初から背中に手を当ててもらおうと安心して倒れられる」等、お互い話し合ったり、位置や姿勢を確認しあったりするようになった。また、倒れることに対する恐怖感が強い場合は、最初から背中に手をつけたまま少しずつ倒れていったり、支える姿勢を確認した後倒れるようにしたりして不安が少なくなるような工夫をしていた。

その後、参加者から以下のような感想が語られた。

「最初は支える方の手と自分の背中との距離感が分からないと結構怖かった」

「相手の手が背中についていないと不安なので、話し合っって最初から背中に手をつけといてもらって倒れていくようにしたら怖い感じがしなくなった」

「倒れていく前に振り向いて支えてくれる人の姿勢や相手との距離を見ておいてから倒れていくとそんなに怖くなかった」

「最初はあまり離れないようにして、短い距離で徐々に手と背中との距離を遠くしていくようにすると、そんなに怖さを感じなかった」

「いろいろと話しながら行くと安心して倒れることができるようになった」

「話し合いをしていくと相手への信頼感が増えてきて、安心して支えてもらうことができた」

「身体を使って実際支えること、支えられることをやってみると、支える方の限界を見極めることがとても重要だと感じた」

「支える方の限界を超えると支えることができなくなり、支える方・支えられる方どちらも危険になる。だから支える方は、自分が受け止められる範囲を知ることが大事で、その範囲内で受け止めていくようにしなければならないと感じた」

「福祉の現場で福祉を要する人を支える専門職についたら、どのくらい相手を支えられるのかという自分の力量を知っておかないといけないと思う」

(演習3) なんてたってアイドル

1) 目的

参加者が相手の意図を瞬時に察した上で適切な対応をすること、及びある役割を演じたときに生じた感情や考えを表現することを目標とした。

2) 実施方法

アイドルとのサイン会で、参加者1人ひとりがアイドルの役(主役)になってファン全員と一人ずつ握手をしながら、数往復の会話をすることができるとの場面設定をした。その後ファンからの応援や質問に対して瞬時のうちに相手の気持ちや質問内容を理解して対応するようにした。なお、アイドル役以外はファン役になることにした。

3) 実例

ある町のイベント会場にアイドルAが登場しサイン会が始まった。ファンは大好きなアイドルAからサインをもらった後、握手しながら会話ができるのを楽しみにしている場面を設定した。監督の「今日は大人気アイドルAさんの握手会です。大変忙しAさんはここにいるファンの皆さんと握手をしてくれます。一人ずつ少しだけ会話していいようになっています」とのナレーション後、以下のような状況となった。

ファンB：「握手して下さい！ずっとファンだったんです」
アイドルA：「ありがとうございます」
ファンB：「いつもCD聴いていま～す。どうやったらAさんのようになれるか？」
アイドルA：「今のままで素敵ですよ」
ファンB：「ありがとうございます！頑張ってください」
アイドルA：「ありがとうございます」
会場係C：「次の人どうぞ。時間があまりないので、よろしくご協力お願いします」
ファンD：「こんにちは。何て言えばいいのかわからない。舞い上がって……、でもうれしいです」
アイドルA：「ありがとう。応援してね」
ファンD：「握手して下さい。それと、あのひととの噂は本当なんですか？」
アイドルA：「それはちょっと秘密です。話すことができなくてすみません」
ファンE：「こんにちは。握手して下さい」
アイドルA：「こんにちは。来て下さってありがとうございます」
ファンE：「Eくん大好き！…って言って下さい」
アイドルA：「Eくん大好き！……これでいいですか？」
ファンE：「ありがとうございます！すごく嬉しいです。これからも頑張ってください」
アイドルA：「ありがとうございます」

(以下省略)

全員がアイドルとファンの役割を演じた後、次のような感想が語られた。

アイドル役の感想には次のことが述べられた。

「今回、アイドルの握手会に参加する、または実際に自分がアイドルになるという設定で、限られた時間で会話をするとということでしたが、初対面の人と一瞬で打ち解け、関係をつくるということは、そう簡単には出来ることではないと実感した」、「すぐに相手の気持ちを読み取り、受容するには、相手の表情、声の様子、態度など様々な視点からその人が今どういう状態にあるのかを察知しなければならなかった」、「相手のことを受け入れ、限られた時間で会話を出来るということは、相談援助を行うにあたってとても重要なポイントなのではないかと感じた」、「自分自身がアイドル役を演じることによって、自分に好意を持ってきている、自分を必要としてくれているという感覚を味わうことが出来たので、心理療法という面でも大きな利点があるような気がした」

ファン役の感想には「アイドルはどんな質問や要望があっても笑顔を崩さず、できるかぎり要望に応えていた。たいへん疲れることだと思った」、「アイドルはファンであれば誰にでも感謝の気持ちをきちんと伝えていた。たいへんなことだと感じた」、「アイドルは補助自我の機能を果たしていたと思った」、全体としての感想には「相談援助は様々な人間同士が関わらずして成り立つものではない。福祉に関する専門職には相手を受容する心、共感する心を持つことは重要なことだと感じることができた」等があった。

(2)心理劇(第2相：劇化)での演習の実際

(演習4)

1)目的

参加者が劇(第2相)のなかで場面の状況に応じた適応行為をすること、及びある役割を演じたときに生じた感情や考えを表現することを目標とした。

2) 実施方法

クライアントとクライアントの家族の間の意見の違いが見られた場面を題材にして劇化した。参加者が思いついた場面を語りだし、施設で行われている介護の様子を知るために、思い切ってクライアントとその家族とホームヘルパーと一緒に特別養護老人ホームのソーシャルワーカーに相談する場面の劇を設定した。

3) 実例

監督(演習担当教員)からの提案によって、参加者で話し合いながら劇の場面を設定することになった。その結果、クライアントは男性の高齢者で、要介護認定がなされ、訪問介護を受けていること、クライアントの家族には腰痛持ち、夫の介護を負担に感じ始めている妻、仕事があり日中は不在の娘、福祉施設の社会福祉士であるソーシャルワーカー、訪問介護を行っているホームヘルパーが登場することになった。なお、ソーシャルワーカーとホームヘルパーの間では、クライアントとその家族に了解の上、連絡を取り合って事前打ち合わせは既に済ませているとの設定とした。

監督が場面の状況をイメージアップするため、「クライアントは要介護認定を受けています。訪問介護を受けているものの近頃クライアントの家族はそのクライアント(夫)の介護を負担に思うようになってきています。夫を施設に入れたいのですが、一度話してみたら夫は怒って拒否してしまいました。夫の訪問介護は週に3回行われていますが、要介護レベルが高くなっており、生活において介護が必要なことが増えつつあります。」と話をした。

施設の面接室の扉をノックしてクライアントとその妻、娘、訪問介護を行っているホームヘルパーが部屋に入ってくる。ソーシャルワーカーは「どうぞ。はいいいですよ。」と言いながら席を立てて迎える。ソーシャルワーカーとクライアントが向かいあって着席し、クライアントの横に妻と娘、そして訪問介護を行っているホームヘルパーが着席した。その後、クライアントは「自宅で介護を受けることを希望しているのですが……。」、妻は「要介護度が高くなり、ホームヘルパーさんが来ているときは安心なのですが、ホームヘルパーが来ない日は介護が大変で、目が離せないし、不安になってしまいます。」、娘も「私もおかあさんと同じ気持ちです。おかあさんが過労で倒れないか心配だけど、おとうさんは家にいたいのでどうしたらいいのかわからなくなります……。」、ホームヘルパーは「毎日訪問介護したいけど、介護保険の制度では週3回しか伺えなくて悩んでいます……。」と、それぞれが悩みを語った。ソーシャルワーカーは相槌を打ちながら、「皆さんはおとうさんのことが心配でたまらないのですね。一緒にどうしたらいいのか考えていきましょう……。」と話が展開していった。ソーシャルワーカーからは「訪問介護に加え、デイサービスを利用してはどうだろうか」との具体的な提案が出され、ほぼその結論に落ち着いたように思われた。

その後、監督は話が途切れたところで劇を終了し、シェアリング(第3相)となり、以下のような感想が語られた。

妻と娘の役を演じた学生は「本当は家でおとうさんと一緒に暮らしたい気持ちが強いのですが……、要介護度が高くなり面倒がみきれないと感じてしまって…特別養護老人ホームに入所した方がいいと考えもして……、すると複雑な気持ちになってどうしたらいいかわからなくなってしまって……。」とかなり悩んだことや葛藤があったことを語った。また、観客役の参加者からは「ソーシャルワーカーが利用者や家族の状態について聞いた後、福祉サービスに関する具体案を出したところで、演者全員が安堵した表情になったことが印象的だった」、「ソーシャルワーカーが具体的な選択肢を出したのを聞いてホッとした」、「ソーシャルワーカーが心配りをしていたことが伝わってきた」との感想が語られた。

6. 考 察

ウォーミングアップ（第1相）後の感想から次のことが考察される。

演習1では、相手から話しかけられる椅子に座っている人の役を演じてみると、話しかけられるまで相手がどのような人で、どのようなことを話しかけてくるのかがわからないから不安だったこと、相手の意図を察して対応することは難しいと実感したこと、及びソーシャルワーカーの役割に置き換えられること等に参加者は気づいていた。つまり、相手から話しかけられる役割を演じることで、相談を受けることに対する不安感、気持ちや意図を察することの難しさを感じる自己に気づくと同時に、ソーシャルワーカーと同様の役割である補助自我を演じたことを認識するに至ったといえよう。

演習2では、実際的に身体の重さを実感しながら行った支える役、支えられる役を演じることを通して、お互いの距離や姿勢を確認したり、話し合ったりしながら不安を少なくすること、相手に支えてもらうには信頼感を要すること、支える方が自分の限界を見極めておく必要があること、及び支えることはソーシャルワーカーの役割、支えられることはクライアントの役割と同じように考えられること等を参加者は認識していた。このため、相談援助を行うにあたって、相手とコミュニケーションをとること、信頼関係を構築すること、相談援助者は自分の力量を把握しておく必要があることの重要性を実感したものと考えられる。

演習3では、参加者は相手の意図を瞬時に察した上で適切な対応をすることが要求されるアイドル体験を通して、初対面の人と一瞬で打ち解けること、相手の気持ちを読み取り受容すること、笑顔を崩さず要望に応えること等の難しさを実感していた。つまり、アイドルの役割は相手を受容しながら、相手のニーズに沿った対応をしなければならないと感じていた。このことについてはソーシャルワーカーの役割と同様と認識していた。

心理劇では行動が重視されるが、行動の主体としての心、意志、感情へのフィードバックが重視される。そこが難しいこともあるけれど、人間性を感じとり、それに接するときの楽しさや喜びも大きくなるとされている⁶⁾。これらのウォーミングアップに関する演習では、演者としてある役割を演じた結果生じた感情や考えが生き生きと語られていた。このことは、行動の主体としての心、意志、感情へのフィードバックがなされていると捉えられよう。

劇（第2相）後の感想から次のことが考察される。

演習4では、娘役となった演者から、劇のなかで要介護者となった父親に対する一緒に暮らしたい気持ちが強いのに、自分の力では面倒がみきれないと感じて施設入所した方がいいと考え、そのことで複雑な気持ちになってどうしたらいいかわからなくなってしまったかなり悩んだことが語られた。このことは、同一の対象に相反する価値意識を持つ感情が揺れ動いているため、アンビバレンスな感情が生じたことを表現しているとみられる。また、観客役からはソーシャルワーカーが出した具体案で皆が安堵し、ソーシャルワーカーの気配りが伝わってきたと語られた。演者、観客は劇の場面が醸し出す雰囲気を感じながら、演じられている場面を自分のこととして捉えていたとみられる。また、ソーシャルワーカー役は演者の気持ちを受容しながら打開策を講じたことから補助自我として機能したと考えられる。

ソーシャルワークの分野において用いられている自己覚知（self-awareness）については、援助者が他者と自分をも含めた状況（援助関係やその時々起こっている事柄）を的確に理解し、とらわれなく対象者に相対できるように、ありのままの自己に気づき受容することをさす。また、自らの価値観、偏見、先入観、行動や反応パターン、パーソナリティなどのより深い自覚として捉えられるとされている⁷⁾。演習4において、娘役となった演者にアンビバレンスな感情が生じ、その感情をその他の演者や観客役、及び

補助自我であるソーシャルワーカー役も含めて劇を構成する全員が感じとり、問題が解決する結果となった時に安堵したことは、場面の状況を把握した上で自己覚知がなされたことを示していると考えられる。

これらのことから、心理劇におけるウォーミングアップ（第1相）に関する演習1～3、及び劇（第2相）に関する演習4で、各場面のなかである役割を演じる体験とそこから生じた感情や考え述べることによって、自己洞察へと導くことになったこと、特に劇（第2相）では、劇中で複雑な感情が生じ、その感情を捉えながら悩んだことは自己覚知がなされることで相手の状況や気持ち、場面に応じた適応行為をとることができるようになったことを示唆している。心理劇は筋書きや脚本がなく、与えられた人間関係や集団のなかでの個人の役割行為を通じてパーソナリティの発展を促すことが本意であるとされている⁸⁾。また、心理劇の意義は、クライアントが舞台上でさまざまな役割を演じることを通して、内的葛藤や体験を表現することにより、自己洞察へと導くと同時に、新しい役割を演じることを実感をもって学習することである⁹⁾。したがって、心理劇を活用した相談援助演習は参加者の自己覚知を促すように作用したと捉えられよう。

7. 結 論

本研究によって相談援助演習で心理劇を活用すると、①相談を受けることに対する不安感、気持ちや意図を察することの難しさを感じる自己に気づくこと、②ソーシャルワーカーは補助自我と同様の役割であること、③相手とのコミュニケーション、信頼関係の構築、及び相談援助者は自分の力量を把握する重要性に気づくこと、④補助自我（ソーシャルワーカー）は相手を受容しながら、相手のニーズに沿った対応をしなければならないこと、⑤演者の感情を参加者で共有し問題が解決すると自己覚知がなされること、⑥自己覚知がなされることで相手の状況や気持ち、場面に応じた適応行為をとることができるようになること、以上の知見が示唆された。総じて、心理劇を活用した相談援助演習は参加者の自己覚知を促すと察した。

引用文献

- 1) 京極高宣監修 現代福祉学レキシコン第二版 185-186 雄山閣出版 1998
- 2) 秋元実世・大島巖・芝野松次郎他編集 現代社会福祉辞典 447 有斐閣 2003
- 3) Hamilton, G. Theory and Practice of Social Casework Columbia Univ. Press 1940
- 4) Biestek, F. P. The Casework Relationship Loyola Univ. Press 1957
- 5) 国分康孝編 カウンセリング辞典 223 誠信書房 1990
- 6) 増野肇 サイコドラマのすすめ方 金剛出版 1990
- 7) 秋元実世・大島巖・芝野松次郎他編集 現代社会福祉辞典 164 有斐閣 2003
- 8) 台利夫 集団臨床心理学の視点 心理劇を軸にして 誠信書房 1991
- 9) 小林司編 カウンセリング事典 119-120 新曜社 1993

参考文献

- 秋山博介・谷川和昭・柳澤孝主責任編集 福祉臨床シリーズ編集委員会編 相談援助演習 弘文堂 2008
 白澤政和・石川久展・福山和女 日本社会福祉士養成校協会（監修） 社会福祉士相談援助演習 中央法規出版 2009
 日本社会福祉士養成校協会（監修） 相談援助演習 教員テキスト 中央法規出版 2009
 増野肇 集団精神療法としてのサイコドラマ 金剛出版 1990
 黒田淑子 心理劇の特質 ドラマ探訪 朝日クリエ 2008